東北大学狩野文庫デジタルアーカイブシンポジウム「江戸に学び、江戸に遊ぶ」 2020 年 12 月 20 日

狩野文庫の研究・教育での活用について

佐倉 由泰

東北大学文学研究科教授 国文学研究資料館 拠点連携委員

中世文学会・日本語学会 **2019** 年度秋季大会記念展示 2019年10月25日(金)・26日(土)・27日(日) 開催

- 1 国宝 史記 孝文本紀 巻十〔レプリカ〕 〔狩野文庫〕
- 2 国宝 類聚国史 巻第二十五 [レプリカ] 〔狩野文庫〕
- 3 秋田家安倍氏系図 〔秋田家史料〕
- 4 和漢朗詠集 〔秋田家史料〕
- 5 詞花和歌集 〔秋田家史料〕
- 6 春秋往来 〔秋田家史料〕
- 7 太平記鈔 附音義 〔漱石文庫〕
- 8 和漢朗詠註抄 〔狩野文庫〕
- 9 君台観左右帳記 〔狩野文庫〕
- 10 倭玉篇 延徳本
- 11 倭玉篇 慶長18年版本 〔狩野文庫〕
- 12 伊勢物語 嵯峨本 〔狩野文庫〕
- 13 徒然草 嵯峨本 〔狩野文庫〕
- 14 徒然草 古活字本 〔狩野文庫〕
- 15・16 平家物語 下村時房本 二種 [ルビのある方は狩野文庫]
- 17 倭名類聚鈔 元和古活字本 〔狩野文庫〕
- 18 倭名類聚鈔 寬文7年版本 〔狩野文庫〕
- 19 ふんしやう 奈良絵本 [狩野文庫]
- 20 新撰遊覚往来 [狩野文庫]
- 21 紫日記 [狩野文庫]
- 22 今昔物語集 新宮城本(しんぐうじょうぼん) 〔狩野文庫〕
- 23 易林本節用集 [狩野文庫]
- 24 新撰類聚往来 〔狩野文庫〕
- 25 富士野往来 〔狩野文庫〕
- 26 明智軍記



明智軍記

明智軍記 (江戸時代成立)

元禄15年(1702)版本

『明智軍記』は、明智光秀の生涯を語った軍記物語であるが、内容に多くの 虚構が含まれている。そこには、稀代の才人、明智光秀の言動を通して、歴史、 地理、事物、教訓を学ぶというような計らいもうかがわれ、軍記としての特徴 に加え、往来物のような性格がある。当時の世の中の知に対する関心の高さ に応える作品として書かれたものと考えられる。この元禄15年(1702) 版本に先行する写本は、これまでのところ見出されていない。作者は未詳で あるが、出版のために著された作品であるのかも知れない。これからの多く の検討を要する作品である。ここに開いたのは、巻第八上の、天正5年(15 77) に、松永久秀が信貴山城で最期を遂げたことを記す場面である。『明智 軍記』は、その時に莫大な宝が失われたことを詳述しているが。それによる と、失われたのは、名物の茶釜の平蜘蛛だけではなく、膨大な名刀、名画、名 筆、名物の茶器、名香、名石、金工の名品、組織物の良品等に及んだという。 中でも圧巻が「紀貫之ガ書シ古今集、源ノ順ガ筆ノ後撰集、公任ノ書シ伊勢物 語、俊成筆ノ千載集、定家手跡ノ新勅撰、家隆ノ書タル源氏物語」である。こ うした宝が「片時ノ煙」となった、と『明智軍記』は述べる。が、平蜘蛛はと もかく、「紀貫之ガ書シ古今集」以下の七品をはじめとする宝の数々を、松永 久秀が実際に所有していたとは考え難い。これも、『明智軍記』の特質を考え る上で重要な記述である。

ヨリ青八ケンバ松永彈正内外ノ敵三度ラ失と今い 玉八惟任惟住羽柴别喜ノ輩我ガラント 又處上や思ピケン本丸ニ引い 合せ諸軍ラ下知し紫城ノ鎧同毛ノ甲二鹿角ノ前立艶 忻入相圖/ 鯨波ラゾ車タリケル城介殿同ク 彼使者ラ先立テ酒二志貴へが趣キケル松永 則佐久間縫殿助同與市左衞門ラ大將ニテ三百餘騎 力」城中へ引入ケリ佐久間が者共二ノ丸、テ安々 八夢三モ不知誠ノ加勢ゾト思ヒケルニや関道ラ思や 備日比貯置し 喚叫デ諸口

悉之取出了三或八古來銘作人太刀長刀京鎌倉備前大和 其外國々 記光典主土佐將監光起曾我玄仙舟野幽清永仙法眼 安忠舜華趙昌馬遠以下吾朝二八周文雪舟可翁啓書 棋集公任人書と伊勢物語俊成筆ノ千載集定家手助 筆倭國二八道風佐理行成并二古今名 ノ墨頭畫圖 玉楊州ノ金其外諸道具ラ何レモ不残焼拾 書タリン屏風掛物サテ墨師ラ義之 ノ手助紀貫之か書し古今集源 鍛治共心ラ盡しキタとタル名物ノ類又い 人明智重記卷八 一秋ナル異國三八無準牧漢玉磵顔塩

三吉野紅塵法率經盧橋八橋ナ 維曾毛多雅ヨリ出タル赤旃檀 信長公度々所望成しかた久秀強テ惜之終二不指下 童華立ノ類不追等其中二平野十云無雙ノ金有シラ 亭三テ 明物異國ノ嶋々日域ノ儀ハ 捨三ケル借又名香ラ弄了一個 ル三唯今献三奪と事ラ過熱 吟數ラ不知或八數奇 能ら玉とし三七超又八十姓と茶入茶碗金水指真 書タル源氏地 具集ル事梢以テ唐土 不及甲古往義政公東山 シテ真先三是ラ 姓真盤羅國真中佐曾 有消逝古木中川 タル香共ラ カ

集置蜱頭 挟集ノ貯 月貫等小柄筆架文鎮香匙火筋ノ類或ハ蜀江ノ錦吳 ケルラ悉之火ラ放テ片時ノ煙ト焼拾ツ子息右衛門佐 山ラ愛シッ 害し焼失ケル松永一類菌様三忽チ滅亡せし事ラ思 三主君三度々逆心し人民ラ苦しメケル積惡ノ至り難 八通ラ始メ一族十一人都合二百三十餘人思々三自 へ絹綿三包三箱袋三人 綾練蟬羽纐纈羅綾鈍子以下ノ織物際限ナク取 タリ借祜乗宗乗乗真ガ手際ラ盡し雕ケル 、剡溪石震澤石九山八海ナー、云石共ラ 香営其類品モ餘多ナリス盆 テ幾千萬ト云数ラ不知有ケ

○ 「列叙」とは 一

ものごとを念入りに表現するために同格のさまざまのことばを次々とつみあげていく表現法 [佐藤信夫『レトリック感覚』(講談社学術文庫、1992年6月。初刊は1978年9月〈講談社〉)における「列叙法」についての理解(253頁)に拠る]。「もの尽くし」、「揃えもの」等とも重なるところが多い。列叙は、世の出来事を捉えつつ、それにこと寄せて世界を語ろうとする作品(世界表象を強く指向する作品)に目立って現れる。そのような作品を「列叙の文学」と称したい。また、「列叙の文学」のうちには、華やかな行列の出で立ちを表現する「行装の文学」と言うべき作品もある。

○ 列叙が際立つ作品

(実に多様なジャンルにわたる。日本式の漢文〈和製漢文〉で書かれた作品が多い。) 『枕草子』 『新猿楽記』 『玉造小町壮衰書』 『堤中納言物語』「よしなしごと」 『曾我物語』真名本 『太平記』 『庭訓往来』 『異制庭訓往来』 『新撰遊覚往来』 『大塔物語』 『桂川地蔵記』 『新札往来』 『長倉追罰記』 『尺素往来』 『文正記』 『富士野往来』 『信長公記』 大村由己『天正記』 『明智軍記』 等

【参考】

佐倉由泰「中世の列叙―世界を表象する知の祝祭―」(『文学・語学』第 222 号、2018 年 5 月) 佐倉由泰「動態としての公権―物語との相関をめぐって―」(『日本文学』 第 68 巻第 4 号、 2019 年 4 月) 等

【関係するプロジェクト等】

- 大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築 計画」(2014年度-2023年度)
- 日本古典籍研究国際コンソーシアム (2020 年度)
- 研究集会「新たな古典学としてのリテラシー史研究―多分野融合による可能性を求めて―」 (2016年9月10日・11日、東北大学川内南キャンパス、主催:国文学研究資料館・東北 大学 大学院文学研究科・ヨッタインフォマティクス研究センター・附属図書館)
- 2019 年度中世文学会秋季大会(2019 年 10 月 26 日~28 日、東北大学川内南キャンパス)
- 東北大学ヨッタインフォマティクス研究センター(2016年度—)
- 東北大学人工知能エレクトロニクス卓越大学院プログラム(2019年度—) 等